

カ
リ
ン

巡り来る季節の贈り物



樹齡がどれ程か定かではないが、幹の部分が空洞になりポツカリと穴が開いているところをみると、随分と歳月が経ったものと思われる。今出川通りに面した旧華族会館の門をくぐると、右手のクローバーハウスのそばにひっそりと立っていて、案外と御存じない方も多いかもしれないが、衰えながらもこのカリンは、毎年春になると瑞々しい若葉をつけ、木瓜に似た薄紅の可憐な花を咲かせ(別名、唐木瓜)、やがて秋には見事な実をつける。その数はごくわずかながら、樹にしがみつくようにしてなっているのを見るとホッとすのである。あゝ今年も実をつけてくれた、と。しかし、この実が季節外れまで樹に取り残されていることは滅多にない。大きな実が枝に取りすがっているのは十字架上のイエスを見るようで痛ましいとも思われるのか、いつの間にか誰かにそっと降されているのである。実は美しい

淡黄色に熟すのになぜかそのまゝで食用にならず、咳止め用にとカリン酒などに造られることが多い。このカリンもどこかの酒瓶に漬けられて、静かに熟成を待っているのかもしれない。また、クローバーハウスの玄関に狛犬よろしくチョココンと鎮座ましましていてもあって、これもまた微笑ましい。幹は飾棚や机、床柱としても珍重されるという。命尽きても何かしらの工芸品として更に生き続けてくれればうれしい。

このカリンについては何の記録も残されていない。今年八十一歳の冷泉家先代当主夫人は、子供の頃はあそこにはありませんでした、とのこと。当主夫人の貴実子さんも、同志社は引越しが得意で、大樹といえどもあつという間に植えかえられ、それは見事ですよ、と笑っておられた。おそらくこのカリンもどこからか移されてきたのだろう。

二村 宏江
(大学文学部教授)